

## 会員の声

### 人的エネルギー・資源の結集

田 頭 規 夫\*

本誌もなんとか2年目をむかえ、ようやく目ざす軌道に乗ってきたことは会員の一人としてよろこばしいことである。

エネルギー・資源研究会の主たる活動はもちろん本誌の刊行であり、本誌の内容の充実が即、会の発展につながり、会の発展は更に一層の内容充実をもたらすものだけに、2ヶ月に一度の本誌の刊行に期待しその成長を楽しみにしている。

本誌は会員のためのものであるから、その内容については会員の声をできるだけ反映させてほしい。又そのためには会員の批判や注文を多く聞き入れる編集であってほしい。そのうちに、おのずから本誌の個性がでてくることを期待している。

まだ生まれたばかりなので、本誌を意識的に方向づける必要はない。会員みんなで育ていくうちに、やがてみんなの好む性格が芽生えてくるであろう。それでよいのだと思う。

さて、今やエネルギー問題は過熱気味であり、その渦中で、世の中の風潮に惑わされることなく正論を示すのも本誌の使命の一つであると思う。

今のエネルギー問題は石油資源の量的・価格的問題に端を発しているので、エネルギーを論ずるとき、いきおい、脱石油が主役となり、省エネルギー・代替エネルギーにテーマが集中する。

エネルギー問題の将来については、楽観・悲観両論があるが、日常手に入る情報によれば代替エネルギーについてはやや悲観的、石油資源についてはむしろ楽観的のムードに傾いてきた。

マスコミもあげてエネルギー問題を危機的に取り上げ、石油資源の新たな発見などの朗報は軽々しく扱われる傾向が強い。

勿論、省エネルギーは最も重要であり、同時に代替エネルギーの開発は死活の問題なので、今の開発ペースは、もっと早めなければおっつかないと考えるが、それと同時に石油資源の新たな開発や採掘にも同様の重要性があると考えられる。

石油のあと30年説と代替エネルギーの開発に関する情報をつき合わせると、遠からず日本にエネルギーがショートする時期が来るが、それについて明確に述べられたものはない。

日本人の特長として、変化に対する順応性が強いことがよく述べられている。石油が安いと云えば全てを捨てて石油に走り、石油危機と聞けば一億総脱石油である。欧米では変化にすばやく対応できないので古いエネルギーが残っている。原子力アレルギーも少ない。これが石油依存度を少なくし、備えがあるように見える。

今後におとずれるエネルギー危機についても、日本人は必ず克服する力をもっていると信ずるが、そのためには、脱石油の速度を早めると共に、新油田開発の推進も必要だ。そして、今こそ油田開発への投資を増す時ではないか。リスクの大きい油田開発は日本の技術と資力によって、開発途上国へ協力すれば、一石二鳥であり、日本で使う石油は自分で探すことになり、将来のエネルギー事情に明るさが増すことは疑いない。

本誌はやはり、代替エネルギー・省エネルギーを主題にすべきではあるが、それに加えて油田の開発

\* (株)エヌ・エス・メンテナンス社長  
〒661 尼崎市潮江西ソウケ2-1

を主体にした石油問題についても最新の技術や情報を提供してほしい。

そして、創刊号に水科教授が云われているように、エネルギー問題についての真実の報告を期待する。又代替エネルギーについても第2号に沢田教授が述べておられるように経済性や実用性を考慮していなければ単に学問的興味に走り、本会の目的から遠ざかってしまう。

日本はめぐまれた海洋国である。四面海に囲まれ、いや応なしに海洋の利用なくして生きていけない国である。広い意味の海洋開発は最も得意の分野のほずであり、海洋に眠るエネルギーの開発は日本民族に課せられた義務のように思える。したがって海底油田の開発に日本の技術を今以上に利用すれば、必

ず期待する成果を収めることができる。我国の石油開発への投資額はメジャー1社のそれにも及ばぬと聞くので、他のエネルギー政策と同様に国家的事業でこれを拡大すべきであると考える。

又、日本のように単一民族で1億人以上の人口をもつ国は他に類を見ない。高い教育を受けたこの頭脳集団はまさにエネルギーであり、資源である。

このレベルの高い人的資源をもってすれば、日本のエネルギー問題も自らの手で緩和又は解決できるものと信ずる。本誌が、今後会員の増大と共に益々人的エネルギー・資源を結集し、我々により正しいエネルギー情報を提供されることを切に望む次第である。

---

## 榎 屋 治 紀\*

エネルギー問題を考えるうえで貴重な視点を提供してくれる最近の書籍について考えてみたい。ノルドハウスの「エネルギー資源の効率的利用」(Efficient Use of Energy Resources, Yale University Press) ロバート・ストボウ、ダニエル・ヤーギン編「エナジー・フューチャ」(芦原義重監訳、日本経済新聞社)、B. ソレンセン「自然エネルギーの理論」(Renewable Energy, Academic Press)などをとりあげよう。

「エネルギー資源の効率的利用」は、エネルギー計量経済学としてここ数年著者が発表してきた論文を集大成したものである。たとえば「バック・ストップ・テクノロジー」の概念、代替エネルギー開発の経済学的意味、涸渇する資源の経済学的扱い方、エネルギー需要関数、エネルギー需要の価格弾性、そして炭酸ガス濃度増大のシャドウ・プライスに至るまで、計量経済学的手法を縦横に駆使して数学モデルによって人間の活動を記述しようとする意志には恐れ入ってしまう。数学モデルを扱う人達は数学モデルの限界をよく知っておりその計算結果を結論として述べる時に留保すべき条件を同時に提示するが、

受け取る側が結果のみを振り回しやすいことは注意しなければならない。しかし、数学モデルの意義は対象を構造的に理解するところにあり、あいまいな関係を明確に定式化してゆくプロセスからは学ぶところが多い。とくに既存のモデルの枠組のなかに新しい問題を包含させていく手法よりも、生じた問題の特性に即して新しい概念を明確化して手法を作り上げていく過程は貴重である。エネルギー問題に関する経済学的发展状況は、この地球規模で生じた問題の解明を通じてひとつの新しい体系をつくり出すようにも思われる。しかしこのような数学モデルの限界は、いかに経済学の本質に研究者が人間として関わるかというところに表われてくるのであろう。

このような数学モデルの信仰に対する批判も含めて、極めて総合的なエネルギーの将来を熟考しようとするのがハーバード・ビジネス・スクールのレポート「エナジー・フューチャ」である。既に訳書が刊行される前から米国ではベストセラーになっていてエネルギー関係者(とくにエネルギー政策論)には多くの示唆を与えるものとして注目されていた。「エナジー・フューチャ」の主張を簡約すれば国